

材料

標準服乙型にならひます。

仕立て方

一寸法

身丈 一五〇センチ（三尺九寸五分）内外。

くし越し 一一二センチ（三分から五分）。

ゆき 六二センチ（一尺六寸五分）。

肩幅 三〇センチ（八寸）。

袖幅 三二センチ（八寸五分）。

袖丈 三八センチ（一尺）内外。

袖口 舟底袖 一七センチ（四寸五分）。

元祿袖・角袖 一一センチ（五寸五分）。

袖附け 二三センチ（六寸）。

身ごろ総幅 並幅四布ぐらゐ。

身八つ口 一三センチ（三寸五分）。

衿肩あき 八・五センチ（二寸三分）。

衿幅 五センチ（一寸三分）内外。

衿下 七六センチ（二尺）。

腰骨の下五センチ（一寸三分）ぐらゐの所から足の甲まで（身丈の二分の一）。

二裁ち方

(一) 地直し

(二) 裁ち方

裁つ前に柄合はせに注意し、又織りむら・染めむら・しみなどは目立たない所に行くやうに工夫します。

文部省調査局刊行誌寄贈

(後) ¥ 1.25

(112)

中等被服二

文部省

昭和二十一年四月一日印刷 同日開始印刷
 昭和二十一年四月五日發行 同日開始發行
 (昭和二十一年四月五日 文部省検査済)

中等被服 二〔後〕 定價壹圓貳拾五錢

著作権所有 文部省

APPROVED BY MINISTRY
 OF EDUCATION
 (DATE Apr. 1, 1946)

東京都神田區岩本町三番地
 發行所 中等學校教科書株式會社
 代表者 龜井寅雄

東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
 印刷者 大日本印刷株式會社
 代表者 佐久間長吉郎

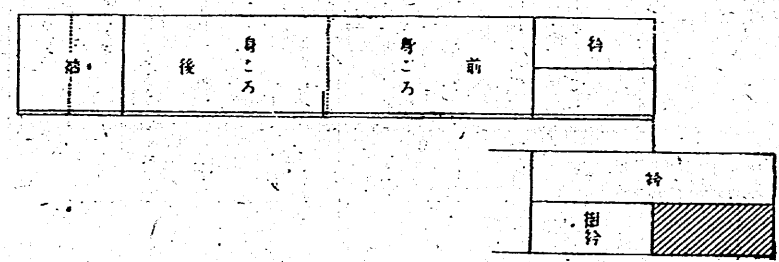
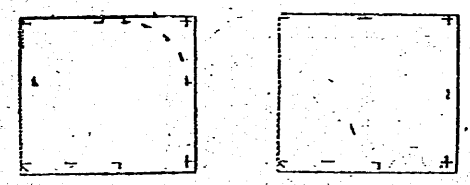
發行所 中等學校教科書株式會社

教科書審定 112ノ二

◇ 総用布九四七センチ(二丈五尺)で圖の裁ち方によつて積つてごらんなさう。

◇ 残り布はどうしますか。又、残り布を並幅で残すやうに積つてごらんなさう。

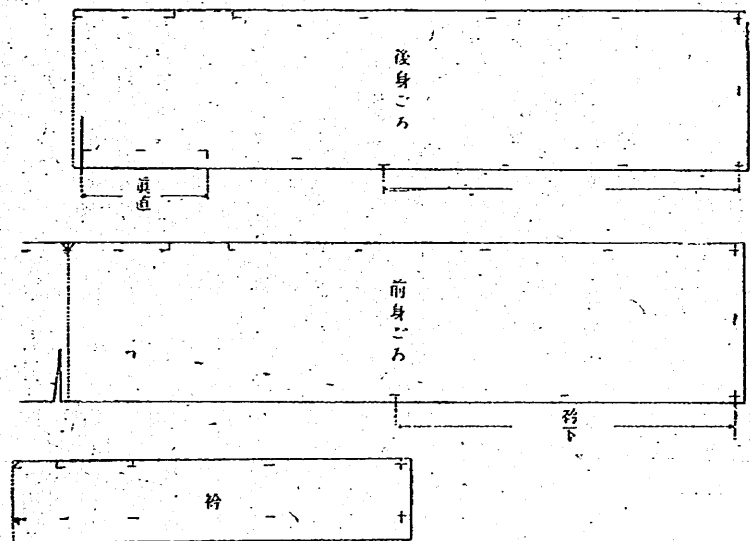
三 模附け
 (一) 袖



舟底袖は標準服乙型にならつて標附けをします。角袖・元祿袖は圖のやうにします。

元祿袖の囲みは半徑一四センチ(三寸七分)の四分圓とします。

(二) 身ごろ・袴



四 縫ひ方

(一) 袖(元祿袖)

(イ) 袖下・囲み・袖口下

袖口の留めはすくひ返し留めとし、袖下はかゝつてゑきます。囲みの整へ方は圖のやうにします。



◇ ほつれの甚だしい地質ならば、袖下の始末はどうしますか。

(ロ) 袖口 三つ折りぐけとし、始め終り共に袖口止まりまでくけます。

◇ 角袖の袂の角は、どのやうにしますか。

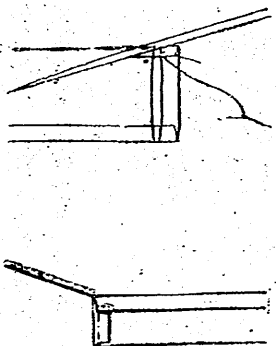
(二) 身ごろ・袴

(イ) 背縫ひ

(ロ) 肩當て・居敷當て

(ハ) 脇縫ひ、縫込みの始末

(ニ) 袴下 三つ折りぐけとし、上は腰より四センチ(一寸)ほど上までくけます。



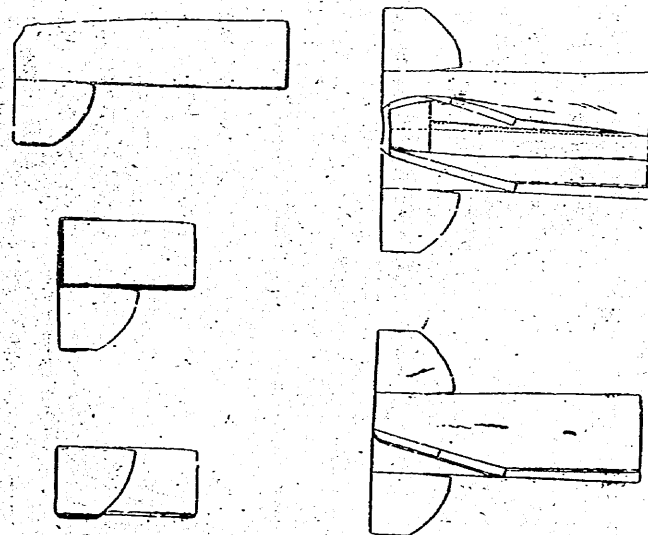
(ホ) 衿付け・衿先・衿くけ 衿付けは釣合よく待針を打つことが肝要です。衿を附けたら、みつ衿心を入れ、衿先を圓のやうに四つ留めにして、縫込みを整へ、衿をくけます。

(ハ) 掛衿

(ト) 袖付け・入っ口くけ・身入っ口くけ

(三) 仕上げ

圓のやうに整めます。

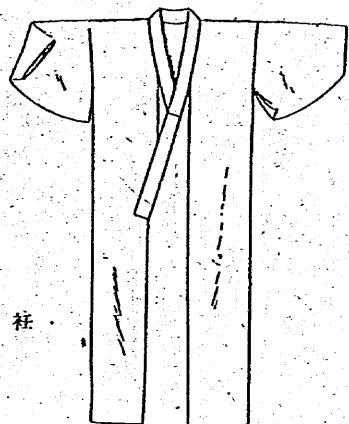


着用・手入れ

大裁ち單長着の女物は普通、着丈の餘分を腰紐で端折りして着用します。又、端折りの代りに腰揚げをして着用することもあります。

大裁ち女物(その二)

形



衿

衿下り

衿先

合ひづま幅

普通、長着には衿を附けました。衿を附けると縫込みが多くなつて、仕立ては面倒ですが、形が整ふし、身幅の融通もきい、又、膝のいたみを防ぐこともできます。

材料

◇ 仕立て直しの材料を用ひる時、特に注意しなければならぬことは何ですか。

仕立て方

一 寸法

後幅 二八・五センチ（七寸五分）。

前幅 二三センチ（六寸）。

衿幅 一五センチ（四寸）。

合ひづま幅 衿幅より一・五センチ（四分）少く。

衿下り 二三センチ（六寸）。

幅は體格によつて加減しなければなりません、参考として裾總幅のきめ方や、後幅・前幅・衿幅の割合を示しませう。

裾總幅 腰廻りに裾の廣がりを加へたものの二・四倍ぐらゐ。

裾の廣がり 六センチ（一寸六分）ぐらゐ。

後幅と前幅 五と四の割合。

前幅と衿幅 三と二の割合。

◇ 腰廻り九二センチ（二尺四寸三分）ならば、裾總幅及び後幅・前幅・衿幅はどれくらゐでせうか。

その他の寸法は「その一」に同じです。

二 裁ち方

（一）地直し

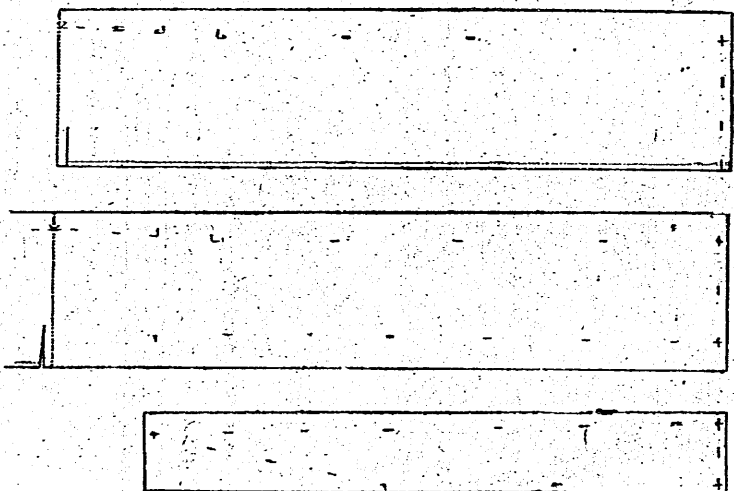
（二）裁ち方

◇ 大裁ち單長着女物の仕立て直しの物で裁ち方を調べ、圖にてごらん下さい。又その總用布は何ほどですか。

◇ 總用布九四七センチ（二丈五尺）で女物衿附きの裁ち方を工夫してごらん下さい。

三 標附け

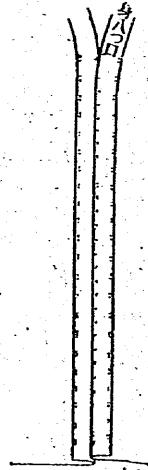
先づ、背縫ひを二枚の釣合に注意して縫つてから、標附けをします。
身ごろ・衿



合ひづまから上の斜めは、裾の方の斜めを自然に延長します。

- ◇ 衽附けの斜めの寸法は何ほどですか。
- 四 縫ひ方

(イ) 脇縫ひ、縫込みの始末



(ロ) 衽附け、縫込みの始末 衽附けは斜

めですから、釣合に注意して待針を打

つて縫ひ、留めは返し留めにします。

縫ひ代は衽の方へ折つて、縫込みの

端を耳ぐけにします。

◇ 耳ぐけはどこまですればよいでせ

うか。

(ニ) 衽附け・衽先・衽ぐけ 衽先とその

上下の待針の打ち方・縫ひ方に注意し

ます。

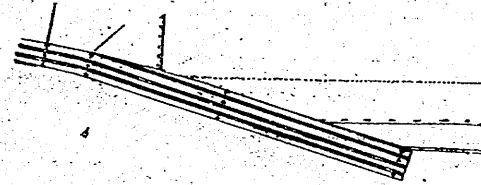
衽はばち衽にすることもあります。

ばち衽は圖のやうに、衽肩あきの所は

衽幅五・五センチ(二寸五分)にし、

衽肩から衽先の下一〇センチ(三寸六

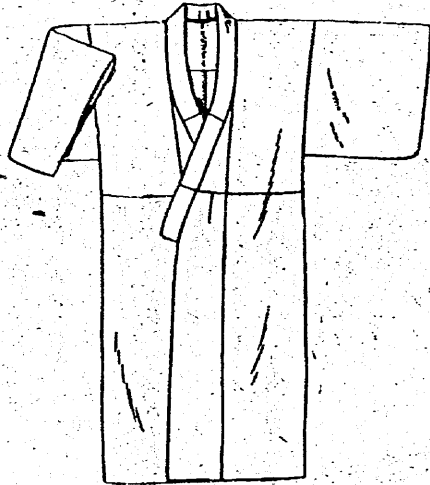
分)まで幅を廣げ、そこから衽先までは同じ幅にします。



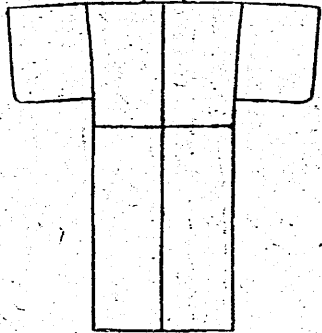
◇ 大裁ち草長着の女物と標準服乙型との得失を考へてごらんさい。

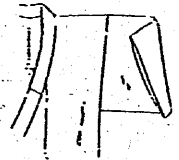
大裁ち男物

形

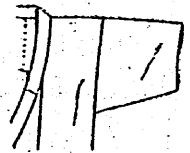


内揚げ





ひろ袖



筒袖

◇ 男物の特徴は何か、考へてごらんなさい。

材料

仕立て方

一寸法

着丈 一三六センチ(三尺六寸)。身長の一〇〇分の八三から九(又は實測)。

内揚げ 一〇センチ(二寸六分)ぐらゐ。

身丈 一四六センチ(三尺八寸五分)ぐらゐ。着丈に内揚げを加へたもの。

ゆき 六六センチ(一尺七寸五分)。

肩幅 三二センチ(八寸五分)。

袖幅 三四センチ(九寸)。

袖丈 角袖 三八センチ(一尺)。

筒袖 三六センチ(九寸五分)ぐらゐ。

袖口 二五センチ(六寸五分)ぐらゐ。

袖附け 附けつめ。

後縫 三〇センチ(八寸)。

前幅 二五センチ(六寸五分)。

衿肩あき 八八五センチ(二寸三分)。

衿下り 二〇センチ(五寸三分)。

衿幅 一五センチ(四寸)。

合ひづき幅 一三・五センチ(三寸六分)。

衿下 六八センチ(一尺八寸)。

着丈の二分の一ぐらゐ。

衿幅 五・五―六センチ(一寸五分から一寸六分)。

揚げの位置 肩から五〇センチ

(二尺三寸二分)ぐらゐ。帯で

かくれる位置。

二 裁ち方

(一) 地直し

(二) 裁ち方

五

五

◇ 総用布九八五センチ(二丈六尺)で、圖の裁ち方に

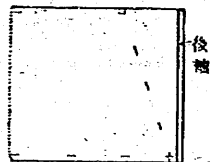
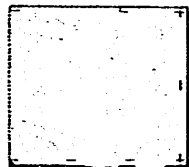
よつて積つてごらん下さい。

袖	身ごろ	身ごろ	衿	
			袖	衿

	指 鈴	衿	
	袖	衿	

三 襟 附 け

(一) 袖



(二) 身 ごろ

(三) 衿

(四) 衿

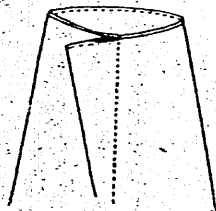
四 縫 ひ 方

(一) 袖 (筒袖)

(イ) 袖下縫ひ 袖幅標の間だけ縫ひます。

◇ 糸の留め方はどうしますか。

(ロ) 袖口 三つ折りぐけにし、袖口の下の所はかさばらせないために、圖のやうに整へます。



袖口の下の所は、標準服乙型の舟底袖のやうにすることもできます。

(ニ) 袖下縫込みの始末 袖下は後袖で前袖の縫込みを包んでくけ附けます。

角袖・ひろ袖は女物の應用でできます。

(二) 身 ごろ

(イ) 背縫ひ

(ロ) 肩當て・居敷當て

(ハ) 脇縫ひ、縫込みの始末

(ニ) 衿下くけ・衿附け、縫込みの始末

(ホ) 裾くけ

(ヘ) 衿附け・衿先・衿くけ

(ト) 掛衿

(チ) 袖附け、縫込みの始末 袖下の所をとちておきます。

(リ) 揚げ 揚げの高さをきめて、着丈の餘分を内揚げとします。揚げを縫ふ時は、背・脇・衿附けの縫ひ目をよく合はせ、又、上前の衿端は出来上り圖のやうに揃へて、衿幅の廣い分を襲にしておきます。揚げ代は裾の方へ折ります。

(三) 仕 上 げ

女物にならつて疊みます。

着用・手 入 れ

自分の身のまはりばかりでなく、家族の被服に就いても、できるだけ手傳ふやうに心掛けませう。さうして着心地を聞いたたり、着具合を見たたり、手入れをしてあげたりませう。

中 裁 ち

中裁ち單長着には、後衿裁ち（四つ身裁ち）・前衿裁ち（五つ身裁ち）などがあります。後衿裁ちは五、六歳から十二、三歳頃まで着られますから重寶です。子供は成長がはげしいものですから、普通、肩揚げ・腰揚げや縫込みによつて加減します。揚げは子供らしさを表すものですが、あまり多過ぎると、活動をさまたげます。



形



肩揚げ
腰揚げ
紐附け

材料

仕立て方

一寸法（七、八歳、元藤袖）

着丈 七五センチ（一尺九寸八分）ぐらゐ。

身丈 一〇〇センチ（二尺六寸五分）。

着ゆき 四二センチ（一尺一寸）。

ゆき 五一センチ（一尺三寸五分）。

肩幅 二三センチ（六寸）。

袖幅 二八センチ（七寸四分）。

袖丈 二八一三〇センチ（七寸四分から八寸）。筒袖ならば二七センチ（七寸）。

袖口 一五センチ（四寸）。筒袖ならば一八センチ（四寸八分）。

袖附け 一六センチ（四寸三分）。筒袖ならば一七センチ（四寸五分）。

四、單長着

後幅 二三センチ（六寸）。
前幅 一ばさ。

身八つ口 二〇センチ（二寸六分）。

衿肩あき 五・五―六センチ（一寸五分
から一寸六分）。

衿幅 四センチ（一寸）。

衿下 二七―三二センチ（七寸から八寸
五分）。

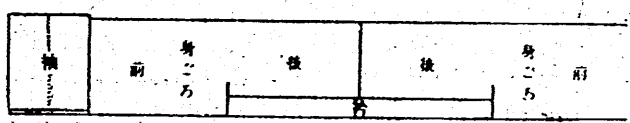
紐丈 八五センチ（二尺二寸五分）。

紐幅 並幅五つ割又は四つ割。

紐の位置 二九センチ（七寸七分）。

二、裁ち方

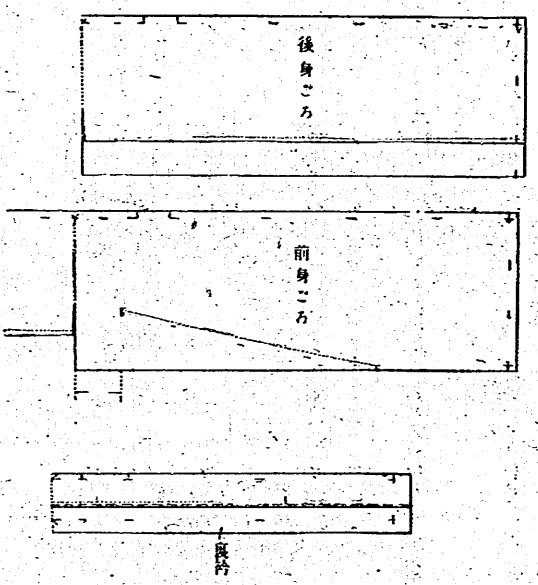
◇ 七、八歳用ならば総用布何ほどでせ
うか。又、七三センチ（一尺九寸）幅
のものはどのやうに裁ちますか。



三、標附け

衿は、表衿幅が足りないので、裏衿を附けますが、裏衿をはいでか
ら標附けをします。

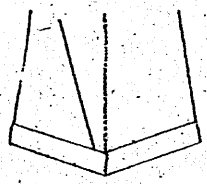
◇ 子供物は衿附けをふくらませると便利ですが、なぜでせうか。



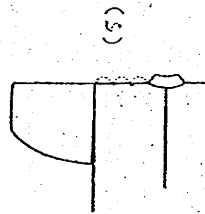
四、縫ひ方

次に挙げる、中裁ち單長着としての特別の部分のほかは、大裁ち單
長着にならひます。

- (イ) 袖附け・八つ口くけ
- 筒袖の時は、八つ口
- 下のくけ代を、圖のや
- うに袖下の縫ひ目に合
- はせて折ります。

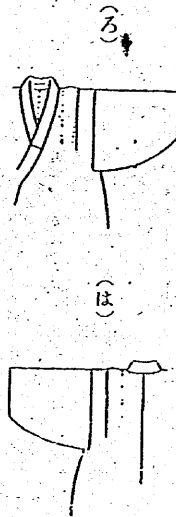


(ロ) 肩揚げ ゆきの餘分を
肩揚げにします。先づ、
揚げの山を圖のやうにし
てきめます。

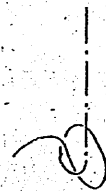


後は眞直にし、前は袖付けまでで〇・八センチ（二分）ほど袖付けの方へ山をずらせて（ろ）圓のやうに斜めにします。

縫ふ時は、二本繰で、二センチ(五分)おきぐらゐに二目落しに縫ひます。肩山には三針出します。



揚げの分量は(ろ)(は)圖のやうに、縫ひ始め・縫ひ終りとも自然に〇・八センチ(二分)ほど淺くなるやうにします。



糸の留め方は、闇のやうに縫ひ目の糸にからけて留めます。

◇ なぜ糸の留め方を圖のやうにするとよいでせうか。

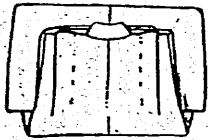
ハセンチ（二寸）ほど長くして折ります。しかし、揚げの寸法によつて多少加減し、かつかうのよい位置に作らなければなりません。

揚げを縫ふ時は二本糸で二目落しにし、出来上り図のやうに縫ひます。

◇ 居敷當ての附け方は、どのやうにすればよいでせうか。

(二) 紐附け 出来上り圖のやうに附けます。男の子は縫合はせ目を下向きに、女の子は上向きにするのが例です。

(ホ) 仕上げ 国のやうに燃みます。



養用・手入れ

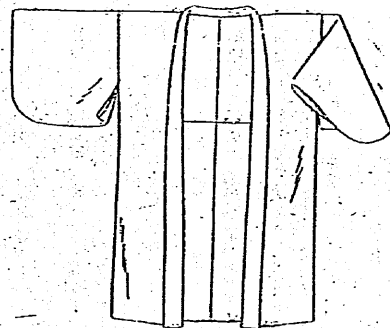
五羽織

羽織は鹿よけとして着始めたものであるといはれますが、現在では、防寒着として冬はもちろん、春秋にも用ひられ、袷・綿入れ・單の別があります。

羽織

形

これは従来の羽織のまちをはふき、仕立て方を簡単にすると同時に、用布を節約したものです。



身丈
くり越し
前下り
「ち」
「ち」下り
衿
裾裏
袖裏
折り返し

材料

用布の地質と色・柄

表 長着と同様ですが、色・柄などは長着と調和のよいものを選びます。

裏 地質はすべりのよいものがよく、色は表より明色・清色がひき立ちます。柄は表より大柄を使ひます。

◇ 裏はなぜすべりのよいものにしますか。どんな織物がすべりがよいでせう。

◇ お互の材料を取り合はせて、裏表の調和のよい幾つかの例を作りなさい。

仕立て方

一寸法

身丈 肩から膝裏まで。

五羽織

ゆき

袖幅

袖丈

袖口

後袖 長着と同じにします。

前幅 身八つ口止まりでは後幅の標通りとし、裾は二一三センチ(五分から八分)狭げます。

身八つ口 九・五センチ(二寸五分)。

衿肩あき

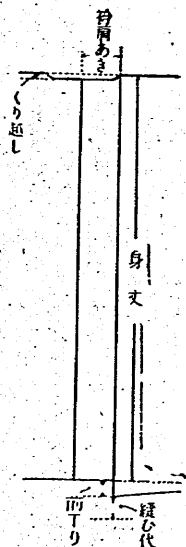
前下り 三センチ(八分)。

「ち」下り 肩から三二―三三センチ(八寸五分から八寸七分)。
衿幅 五・五センチ(二寸五分)ぐらゐ。

◇ 寸法の書いてないところは、長着に對する適當な寸法を考へなさい。但し袖丈は、帯のしめ方や、長着の袖附けの寸法などによつて加減がいろいろあります。

二 裁ち方

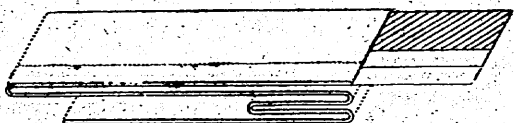
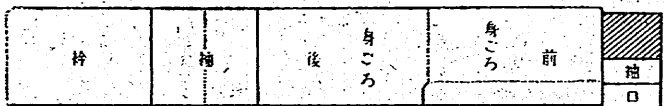
(一) 積り方



◇ 圖によつて必要な衿丈を計算なさい。

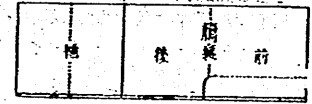
(二) 地直し

(三) 裁ち方

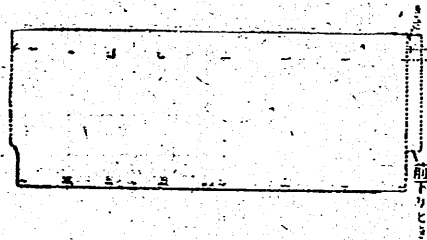
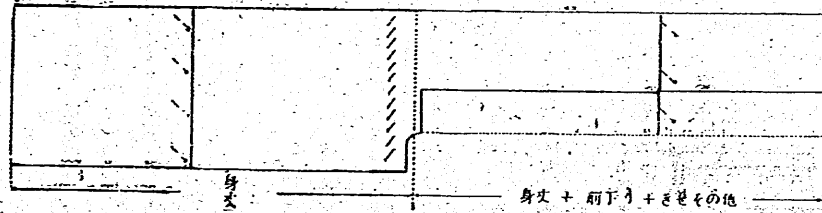
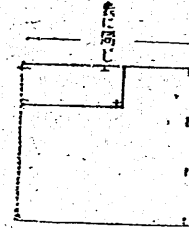
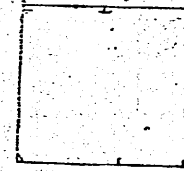


五羽 後
古い物を仕立てかへる場合、後身丈が前身丈より短くなつてもさ
しつかへありません。

◇ 裏用布はどんなにして積り
ますか。



三標附け
(一) 袖

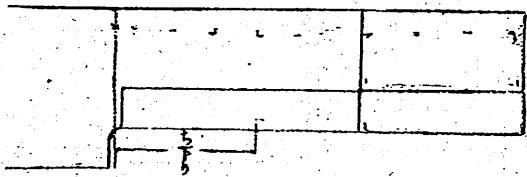


五羽 後

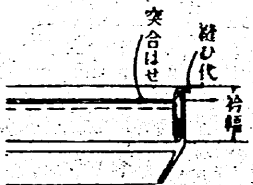
五羽 後

裾幅は後前とも同じに擴げる
ことあります。

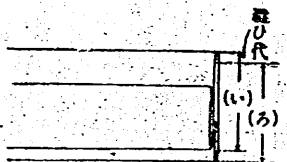
◇ 後幅の標が前に、胴はぎ
の標が表にうつらないやう
にするには、どうしますか。



(三) 衿

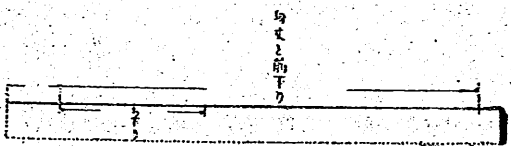


先づ、表衿を布幅の二分の一より一センチ(三分)狭く折り、大
に圖のやうにして折ります。



(い)の間は衿幅の二倍より
〇・二センチ(〇・五分)
狭く。

(ろ)の間は衿幅の二倍より
〇・四センチ(一分)狭
く。



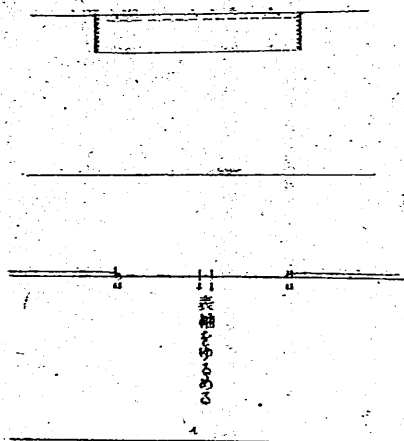
◇ 仕立て直し物で、衿に折り筋がある時、及び衿布が半幅である
時はどうしますか。

四 縫ひ方

(一) 袖

(イ) 袖口布かけ 標を合はせて待針を打ち、標よりきせの分だけ上
を縫つて、標から折ります。次に袖口あきの間で裏袖をゆるめ、
しつけをかけ、兩端を千鳥がけにします。

夫は圖のやうに待針を打つて、袖口を合はせよ。



(ロ) 袖口あき止まりの四つ留め

(ハ) 袖口下・袖下 裏袖口下は後袖の縫ひ代を開き、表は後袖の縫ひ代を斜めに折つて、裏表別々に袖の圓みから八つ口まで縫ひます。袖口下を裏表とち合はせ、袖の圓みも裏表重ねて縫ひ締め、表へ返してしつけをかけ、袖幅標をして、八つ口を縫ひます。

◇ 袖口布を縫ひ附けた所のきせが深いと、どうなりますか。

◇ 袖口を合はせる時、始め終りで裏袖の縫ひ代を深くしたのは、なぜですか。舟底補の時はどうしますか。

◇ 八つ口を縫ふのには、どんな注意がいらしますか。

(二) 身ごろ

(イ) 胴はぎ ごく小針で縫ひ、腰裏の方へ深くきせをかけて折りなす。

(ロ) 前下り 前幅標まで縫ひます。

(ハ) 背縫ひ 四つ縫ひにします。

(ニ) 脇縫ひ 裏表別々に縫ひ、後身ごろの縫ひ代を斜めに折つてとちます。

(ホ) 身八つ口 四つ留めにしで、前後の身八つ口を縫ひます。

(ヘ) 袖附け 袖附け止まりを四つ留めにします。表袖附けは單と同にします。裏は身ごろへ折ります。

(ト) 身ごろの袖附けの所の假どち 「ち」下りから下は裏前幅を少しゆるめ、それから上は半にしで、しつけ線で縫ひ合はせせておきます。

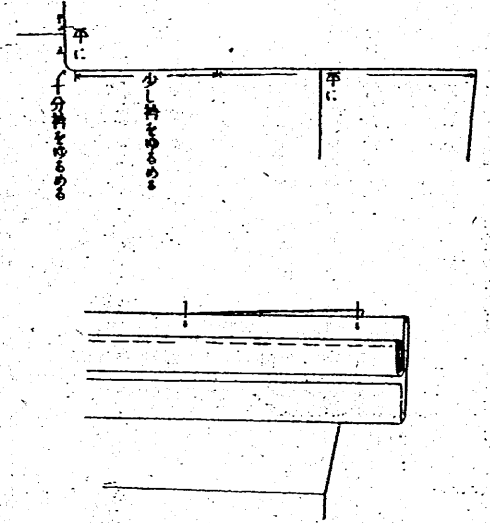
(チ) 「ち」附け 「ち」布を幅四センチ(一寸)、丈一・五センチ(四分)に裁ち、圖のやうに作つて附けます。



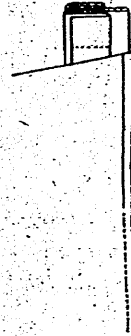
(三) 衿

(イ) 待針の打ち方 衿の表を裏身ごろに合はせ、次圖のやうな釣合に待針を打ちます。

裾から三〇センチ(五寸三分)ほど出た所から、次圖のやうに自然に身ごろを先に出して、裾では〇・八センチ(二分)ぐらゐ出るやうにします。

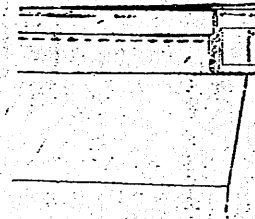


(ロ) 縫ひ方 衿付け縫ひ代の折り目よりも、見返しときせ分だけ浅くなるやうに縫ひます。針目をあらくしますが、衿先一五センチ(四寸)ぐらゐは半返し縫ひ、「ち」の所は斜を返してしつかりと、衿肩あきの所は小針に縫ひます。あと半身の衿附けも同様にしますが、「ち」下り・胸はぎ・衿丈などが左右揃ふやうに注意します。



(一) 衿先の縫ひ、圖のやうにて衿先を縫ひ、圖のやうに整へます。

(二) 衿くけ 衿肩あきの所は小針にくけます。

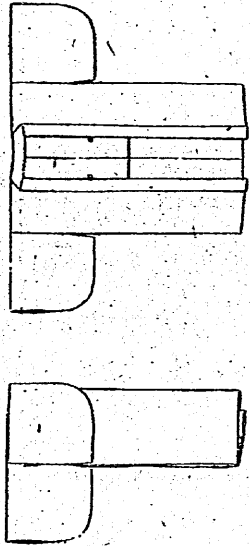


(ホ) 衿のじつけ

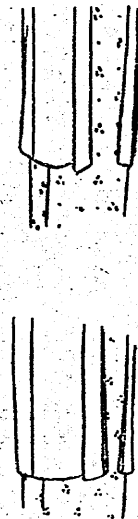
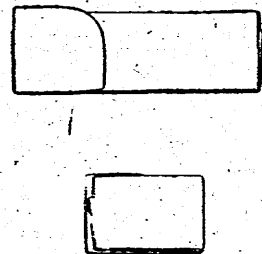


◇「ち」下りから下の前幅をゆるめて假とちするの、何のためですか。

(四) 仕上げ



着用・手入れ

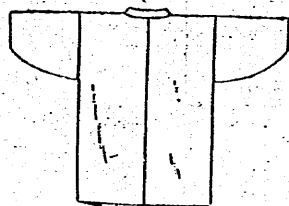
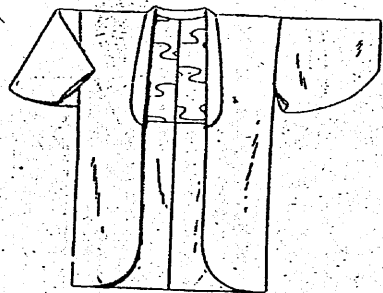


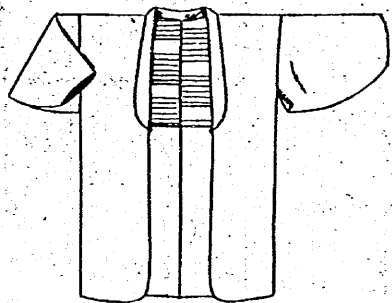
◇ 圖のやうな見苦しさをどうして出来ませうか。

標準服乙型の羽織

形

羽織よりも用布を節約したものです。衿の形はこれに限らず工夫して變へることもできます。





◇ 前襟の角が圓いのと、角のまゝのとの得失を考へてごらんなさ。

仕立て方

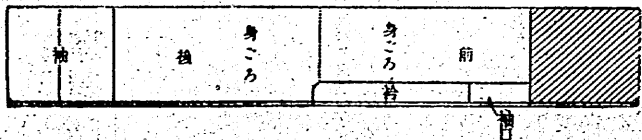
一寸法

身丈 膝裏までか、少し短めにします。

衿幅 六センチ（一寸六分）ぐらゐ。

二裁ち方

古物を利用する場合や、残り布利用の都合では、後身丈を前身丈より短くしてもよいのです。



衿用布は「ち」下りと衿肩あきとの二倍に四センチ（一寸）を加算します。

乙の加算した四センチ（一寸）は、ゆるみ・見返し・させ・縫ひ代の二倍です。

- ◇ 前身丈はどこまで返つたのが、形がよいでせう。
- ◇ 裁ち切りの身丈が、最も短い時、どう積りますか。
- ◇ 一反の布を全部用ひる時は、どう裁ちますか。残り布を出したら、何に用ひますか。

三 標附け

五羽 縫
四 縫ひ方

背縫ひの上端は、四センチ(一寸)ほど裏表別々に縫ひます。袖・脇・身八つ口・袖付けなどは、まちなしの羽織と同じにします。

衿と衿付け及び前端

(イ) 先づ、衿付け丈を正確に測つておきます。
(ロ) 木綿のやゝ糊強くはつたもので、衿心を裁ちます。

(ニ) 表衿に心を合はせて、周囲をしつけ糸でとちます。

(三) 表衿と裏衿とを中表に合はせ、四みと衿幅との標をうつします。

(ホ) 表衿は標の通りに、裏衿は標より〇・四センチ(二分)控へ、裏表の衿を合はせて縫ひ、四みを縫ひ縮めて表へ返し、衿付けの方は裏衿幅をやゝつらせて、しつけ糸で縫ひ合はせておきます。

(ヘ) 「ち」布又は適當な紐を「ち」下りの位置に縫ひ付けておきます。

(ト) 表身ごろに裏衿を當て、衿丈の中央と背縫ひとを合はせて待針を打ち、衿肩あきの四みの所では、衿を十分にゆるめて「ち」

下りまで待針を打ち、衿二枚と表身ごろと三枚を合はせて縫ひ、表身ごろの方へ折ります。

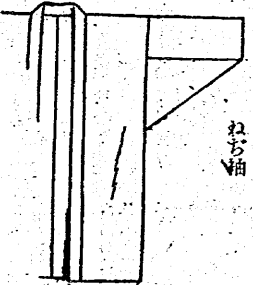
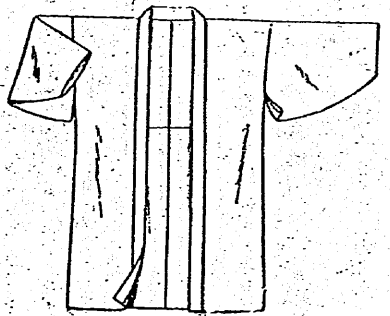
(チ) 「ち」から下は、裏身ごろをやゝ控へめにして、裏表縫ひ合はせます。

(リ) 裏身ごろをかぶせて衿にくけます。

は ん て ん

形

用途は羽織と殆ど同じですが、仕立て方を一層簡單にしたものです。



材料

仕立て方

一寸法

後幅 長着と同じか、又は二センチ(五分)ぐらゐる廣く。

前幅 肩から真直にします。

衿幅 三・五―五センチ(九分から一寸三分)。

他はまちなしの羽織に同じ。

ねち袖(もぢり袖)の場合

袖幅 布幅一ばい。

袖口 一三―一五センチ(三寸五分から四寸)。

袖附け 四―四五センチ(一尺八分から一尺二寸八分)。

二裁ち方

◇ 衿布を別に取らない作り方を研究しな
る。

ねち袖の袖用布は、袖口の二倍に布幅を
加へます。

袖	身	身	前	衿
				幅

六 乳幼児の被服

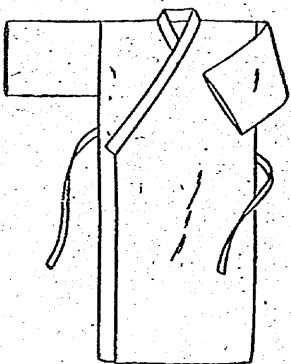
乳幼児の身體は、發育が盛んな割合に抵抗力が弱いので、その被服に就いても特別の注意がいらす。殊に乳幼児は、自分では加減することができないのですから、育てる人が始終氣をつけてやらなければなりません。

乳児用うは着

乳児期も、生後四箇月ぐらゐまでは、大抵寝かせておきますから、手や足を覆ふものがよく、その後は次第に運動が始りますから、動きよいやうに、又、皮膚の鍛錬にもなるやうに、工夫することが肝要です。

形

次に示したうは着はゆるやかで、通氣がよく、手や足を覆ふものであります。この形は、又、中着としても用ひられます。

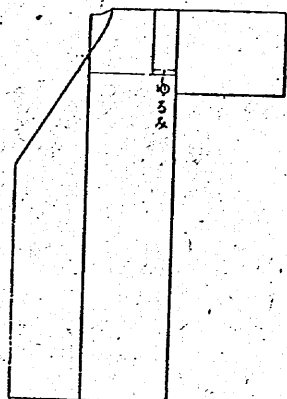


材料

柔かな、軽い地質で、又、洗濯にも耐へるネルの類などがよいのです。
仕立て方

一 寸法

身丈 六〇―七〇センチ（二尺六寸から一尺八寸五分）
 ゆき 三〇―三五センチ（八寸から九寸二分）
 衿ぐり 三・五センチ（九分）
 後幅 一五―一六センチ（四寸から四寸三分）
 ゆるみ 四―五センチ（一寸から一寸三分）
 袖口 一五センチ（四寸）
 袖幅 二・五センチ（七分）
 前の重なり 二四センチ（六寸三分）
 二 型紙の取り方

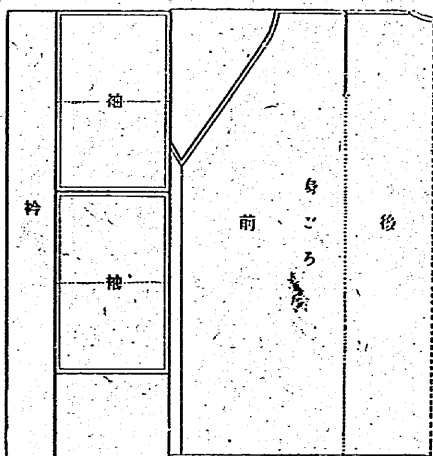


◇ 胸廻りを四四センチ（二尺一寸六分）として、型紙をとつて、
 らんぞう。

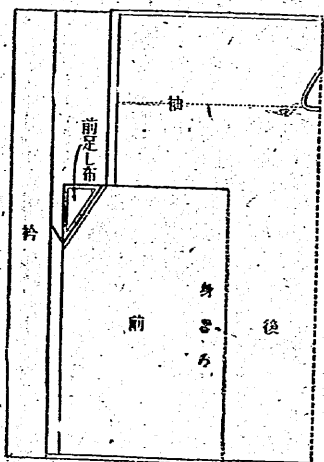
三 裁ち方

各部分に適當な縫ひ代を入れて裁ちます。但し肩は縫ひ目をたて、
 裾は耳のまゝ使ひます。袖は別に裁ちます。

◇ 七三センチ（一尺九寸）幅のネを用ひて、圖のやうに替つと、
 用布はどれくらゐりますか。又、身丈はどれくらゐになりますか。
 ◇ 又どういふ順序で裁ち切ればよいでせうか。



◇ 右の裁ち方と次の裁ち方とは、各、どんな得失がありますか。



縫ひ方

全部手縫ひにし、縫ひ目はかさばらないやうに始末します。

(イ) 袖口 三つ折りぐけ。

(ロ) 袖下

(ハ) 肩 割つてあさへ縫ひ。

(ニ) 衿下 三つ折りぐけ。

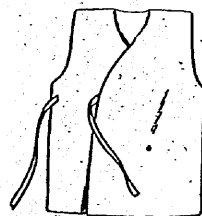
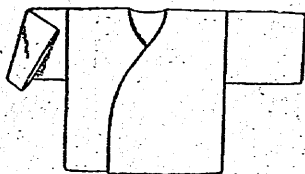
(ホ) 衿

(ヘ) 袖附け

(ト) 紐縫ひ・紐附け

形

乳児用下着



材料

仕立て方

一 型紙の取り方

肌じゆばん

身丈 三〇センチ (八寸)。

ゆき 三〇センチ (八寸)。

衿ぐり 三・五センチ (九分)。

ゆるみ 四・五センチ (一寸から一寸三分)。

袖丈 一三センチ (三寸五分)。

袖口 一三センチ (三寸五分)。

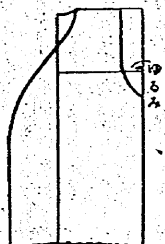
袖口 一三センチ (三寸五分)。

胸着

大縫、肌じゆばんと同じやうに考へて身丈を長くし、袖なしにします。

◇ 袖ぐりの深さはどれくらゐにしたらよいでせう。

各部分の縫ひ代は、うは着と同じやうに考へて裁ちます。衿ぐりと前の端になる所には、見返し布を附けますから、一センチ (三分)。

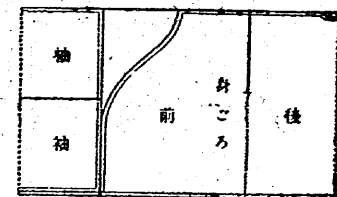


二 裁ち方

肌じゆばん

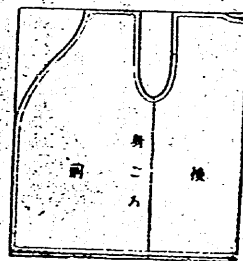
六 乳幼児の授乳

◇ 晒木綿で圓のやうに裁つ場合、用布はどれくらゐりますか。



肩着

肌じゆばんや、うは着と同じやうにして裁ちます。



◇ 布の経済的な使ひ方に就いて考へなさい。

三 縫ひ方

◇ 肌じゆばん・開着の縫ひ方順序と縫ひ方を考へてごらんない。

靴 下 (編み物)

乳幼児は足の保温に特に注意しなければなりません。このためには、毛糸の靴下がいろいろの點ですぐれてゐます。



材料・用具

糸 中細半くり(一オンス)。

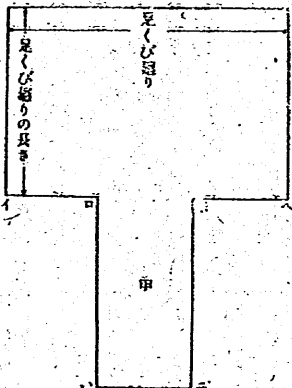
棒針 零號か一號、二本一組。

寸法

目数 凡そ二四目(足くびの長さを測る)。

編み方

先づ二四目を作り、両面編みで四段編み、五段目は足くび廻りの四目



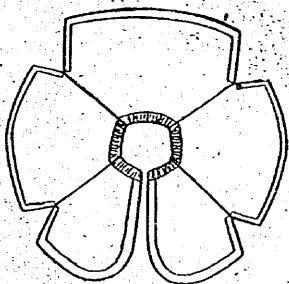
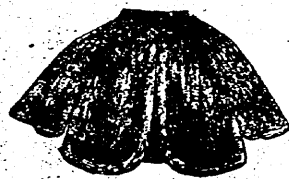
はいつた所で紐通し穴を作り、續けて一段裏編みをします。これをくり返して、足くび廻りの三分の一になるまで編みます。

次に甲の部分として、二四目を増して足くび廻りの三分の一を編み續け、残りの三分の一は増し目なしで編み、前頁の図のやうな形にします。

底の部分はイから始め、ロハニホへの間の目を拾つて、底の深さの約三分の一をそのまゝの目数で編みます。次の三分の一の間は爪先で一行ごとに二目減らし、残りの三分の一は踵と爪先で一行ごとに四目減らし、編み、全部をとお合はせて仕上げます。



(増) うは着(編み物)



(増) 運動服上衣

中等被服「運動服」に同じ。

(増) 女學生用靴下(編み物)

形



材料・用具

糸 並太二くり(四オンス) 強。

棒針 一號か二號、四本一組。

或は

糸 中細二くり(四オンス) 弱。

棒針 零號か一號、四本一組。

寸法

底の長さ 踵から爪先まで。

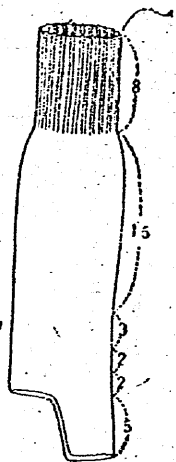
目数 並太 四八―五二目。
中細 五二―五八目。

編み方

編み始めの糸を一五センチ(四寸)ほど附けておき、これを一回りの基點として、ゴム編み八センチ(二寸)ぐらゐ編みます。

次に表編みにして一五―二三センチ(四寸から六寸)ぐらゐ編んだら、ふくらはぎの基點の兩側で各二目減らして三センチ(八分)編み、前と

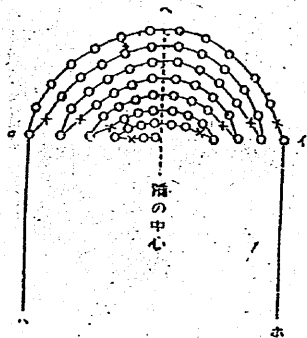
(増) 運動服上衣・女學生用靴下(編み物)



同じやうに一目減らして、二センチ（五分）編み、更に一目減らして二センチ（五分）編みます。

それから、足くびの目数の約半数を甲と踵とに分け、甲の部分はそのままとして、踵の部分だけ表編み一行、裏編み一行を往復して、約五センチ（一寸三分）編みます。

踵のつめ方は、踵の中心より左右へ二目づつ編んだ所からつめ始めます。



一行目は、圖のやうに、

表編みで踵の中心までと二目編み、

二目一度、表編み一目、

二行目は、

針を持ちかへて一目取つて、

裏編み五目、二目一度、裏編み一目、

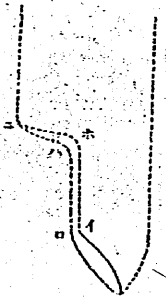
三行目は、

表編み六目、二目一度、表編み一目、

四行目は、

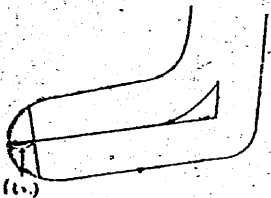
裏編み七目、二目一度、裏編み一目、

以上のやうに中央の目数を一目づつ増して、表編み・裏編みで往復して踵の兩端までつめて行きます。



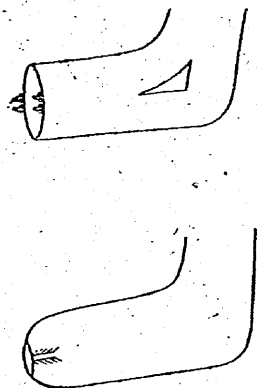
次に、圖のロハの間とホイの間を目を拾ひ、ヘロハニホイへと續けて、踵の中心まで編みます。

甲と踵のさかひの減らし目は踵の方へ一廻りおきに一目づつ（左右で二目）減らし、目数が足くびのところと同じになつた時、圖のやうに底の長さの二センチ（五分）手前までそのまゝ真直に編みます。



(ロ)の間は二センチ（五分）。

爪先の減らし方は、甲と底とに分け、そのさかひで図のやうに一廻り
ききに四目減らし、これをくり返して、元の目数の約半数になるまで減
らして編みます。



残りの目数を甲と底とに分けて、図のやうにはぎ合はせず。

